

『狂執の箱庭で』

【キャラ設定】

◆貴船（きふね） 一臣（かずおみ）

・二十八歳

・180 cm

・85 kg

貴船家の当主。名門華族であり、大地主。

外面がよく万人に優しいと思われているが、実際は他人に興味がないだけ。世の中の人間をわけけるなら、ヒロインと自分とその他大勢。

幼い頃、母が父を裏切って若い男と駆け落ちし、父が酒色に溺れた末に亡くなったことが、人格形成に多大なる影響を及ぼす。

貴船の跡取りとして祖父に厳しく育てられる中で、婚約者であるヒロインと過ごす時間だけが癒やしだった。

少年のころ、年下のヒロインに一目ぼれし、婚約者として自分の手元に置く事を決める。

ヒロインを手元に置くためならどこまでも冷酷になれるし、どんな手段も厭わない。

ヒロインのことを尊重するし、できるだけ願いも叶えたいと思っているが、自分に従わないなどの態度に関しては心が激しく狭い。

上品で柔和な性格だが、子供が無邪気にアリの巣を水没させるように他人を害する。

異母弟の草介のことはそれなりに可哀想だと思っているし、愛着もあるが、人間というより飼犬に対するような感情で接している。

ヒロインのことは「お嬢さん」と呼んでいる。

◆新田（にった）草介（そうすけ）

・二十一歳

・170 cm

・70 kg

一臣の腹違いの弟で、貴船家の援助で大学に通っている。貴船家の前当主が妾（芸妓）に産ませた庶子。

母親が亡くなったことにより、十歳の頃、貴船本家に引き取られる。しかし外聞を気にした一臣の祖父によって、商人である新田家に養子に出される。

幼い頃から聡く賢い子供で、自身の立場をわかまえて、一臣やヒロインにはあくまで使用人として接することを心がけていた。

ヒロインとは相思相愛の仲で、異母兄を裏切る罪悪感を抱えながらも、彼女と幸せになることを選び、駆け落ち。

養父の知人を頼り、遠方でヒロインと生計を立てるべく、まっとうな仕事を得ようと奮闘していた。

穏やかで優しい性格のわんこ系。控えめながら、芯の強さを併せ持つ。

ヒロインのことは「お姫（ひい）さま」と呼んでいる。

◆ヒロイン

やや没落気味な某伯爵家のお嬢さま。一臣・草介とは幼なじみ。

婚約者の一臣のことは兄としか思えず、挙式前夜、ひそかに身分違いの愛をはぐくんできた草介と駆け落ち。

貧しくも幸せな生活を送っていたが、東の間の逃避行は、一臣によって瞬く間に壊される。

親が一臣との結婚を決めたせいで人生がハードモードに。

●トラック 1 東の間の幸福

ヒロインと草介の逃避行から半月。
知人宅の離れで身分を隠し、九尺一間で慎ましくも幸せに暮らす。
生活も落ち着き始め、就活から帰ってきた草介を、料理中のヒロインが出迎える。

場所…狭い小屋

時間…夕暮れ

【ヒロイン、仕事を探しにでている草介の帰りを待ちながら台所仕事をしている】

SE セミの鳴き声

SE 鍋の湯が沸騰する音

SE 包丁で食材切る音

【草介、手ぬぐいで汗をぬぐいつつ部屋に入り、ヒロインに声をかける】

SE：屋外から近づいてくる足音

SE 古びた木戸（引き戸）の開閉

SE:包丁の音ストップ

【15】

草介「ただいま帰りました！

今日も暑いですねえ。

今すぐお夕飯（おゆうはん）の支度をしますから――

【焦って】っ、お姫さま！

何してはるんですか!!」

【15↓7 ヒロインに駆け寄る】

草介「な、なんでお姫さまがお夕飯の支度なんか……!」

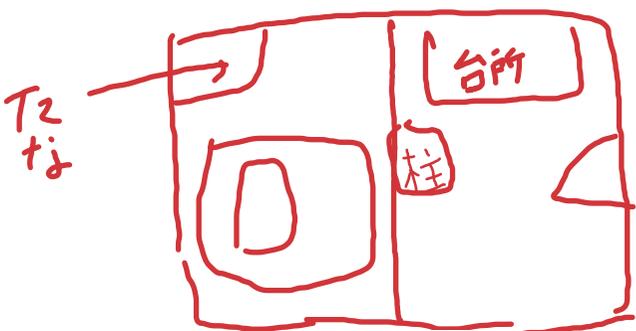
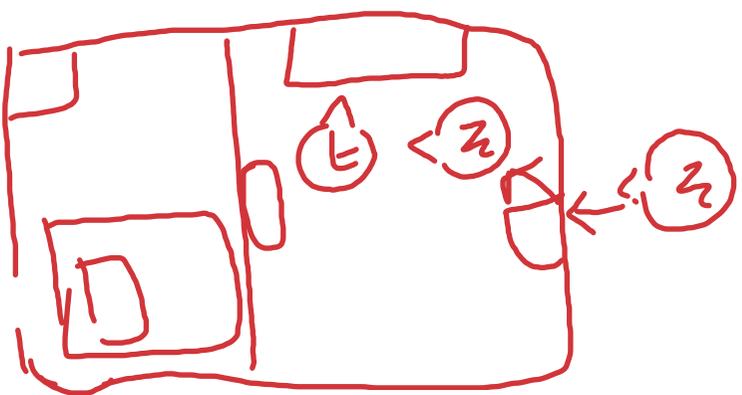
お姫さまは、そんなことしはらんでええです。

家事は使用人の仕事です。

ほら、俺代わりますさかい、包丁はこっちに。

危ないですし、できるまで座って、待っててください」

SE 包丁置く音



【ヒロイン「私も役に立ちたくて」】

【1】

草介「ええんですよ、余計な気い回さへんで、お姫さまは、そこにいてくれはるだけで俺を元気にしてくれてるんです。ほーら、全然元気！ ね？」

【ヒロイン、微笑む】

草介「ああ……ええ笑顔。

見てるだけで、ほんまに力が湧いてきます。せやから……もつとお姫さまが笑顔になれそうなこと、言うてもええですか？」

【ヒロイン首を傾げる】

草介「仕事、決まったんです。

日雇いやのうて、明日から正式に雇ってくれはるって！ 小さい貸本屋ですけど、支度金もくれはって……

明日、二人で住む部屋探しに行きましよう！

この離れ貸してくれてる友人が、保証人になってくれるんで！

それで、ちよつと早いですけど……

お祝いに、果物(くだもん)買う(こう)てきてまいました。

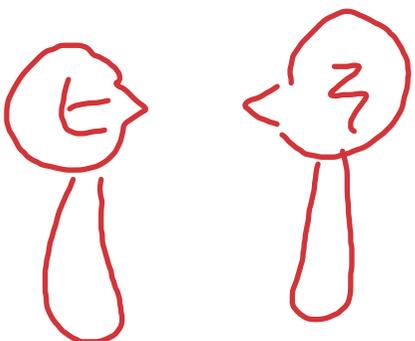
お姫さまに喜んでもらいたいって」

【ヒロイン、感動して草介に抱き着く】

SE：抱き着く

【1】

草介「わ……とと！
お、お姫様、あきません！
俺、今汗かいてて……
そんなくっついたら……！」



【草介、諦めてヒロインを抱きしめ返す】

草介「【いとおしそうに】 もう……こまったお姫さまやね。
俺の言う事なんか、いっつも全然聞いてくれはらへんねやから……」

SE 四秒ほど蝉の鳴き声。少し大きめに

【1 14を見ながら】

草介「もう、半月が経つんですね。

俺がお姫さまを、お屋敷から連れ出して」

【1 ヒロインを見る】

草介「【恐る恐る】後悔、したはりませんか？
家も婚約者も捨てて、俺と駆け落ちしたこと」

草介「ほんまやったらお姫様は今頃、一臣さまと結婚して、

侯爵家の奥方になる予定やった。

こんな小さい家やのうて、貴船のお屋敷で、

使用人さんらにかしずかれて、

贅沢な生活を送ってはったはずやのに。

せやのに俺は、貴女にこんな質素な生活しかさせられへん。

一臣さまやったら、もっと——」

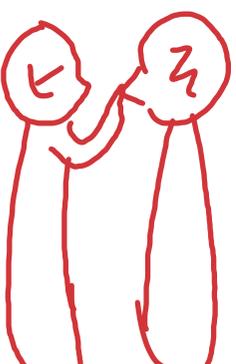
【ヒロインに指で唇を塞がれる】

草介「っ、すみません。しょうもないこと言いました。

わかってはいるんです。

お姫さまは「自分の意志で、俺を選んでくれはったってこと。

幸せやって言葉も、嘘やないって」



【1】

草介「少し早口で」せやけど、怖いんです。

いつかこの幸せな夢がさめるんちゃうか。

目え覚めたら俺は、ただの学生で、

お姫さまは手の届かへん場所にいはるんやないか……って。

【元の速度感で】そう思うと、怖あて堪らへん……」

【ヒロイン「夢だと思うのなら、口づけしてみて」】

草介「ぎよつとして」へあ!？ ちゅ、ちゅう!?

そ、そんなん急に言われても……!?

俺とお姫さまには、

まだそういうの早いとちゃうっていうか……!?

【ヒロイン「嫌なの?」】

草介「い、嫌ありません!」

せやけど……ほ、ほんまに……ええんですか?

俺、まだ全然お姫様にふさわしい男になれてへんし……」

【草介、次のセリフ終わりまでヒロインに急にキスされる】

草介「務めて明るく」俺を元気づけようしてくれはったんは、

めっちゃ嬉しいんですけど——んう!？」

【流され気味にバードキスからディープキスへ。キスのみ30秒程度】

草介「んっ、はあ……あ。

ちゅうって、こんな甘いんですね。

柔らかいし温かいし……美味しい。

【少し困って】箱入りやっただお姫さまが、

こんなん、一体どこで覚えはったんですか?」

【ヒロイン「草介の隠してた春画」】

【1】

草介「へ？ 春画……？」

あつ、あの春画を見はったんですか！？

ち、ちやうんです！

あれはよこしまな気持ちとかやなくて、

勉強のために必要やして、

無理矢理押し付けられて……！」

草介【困り笑い】それでお姫さまが勉強しはったんやったら、
ただの笑い話や」

【ヒロイン「本当の夫婦になりたい」】

草介「ああ……ほんまに、あかんやつやな、俺。

俺に勇気がないせいで、

お姫さまの方から、こんな言わせて……！」

草介「俺からも言わせてください。

今更やけど……俺もお姫さまと同じ気持ちです。

お姫さまと、ほんまの夫婦になりたい。

——ちゆう、してええですか？

今度はちやんと、俺の方から……！」

【1】

草介【ぎこちなくキス、10秒程度】

【3】

草介【右耳にキス、十秒程度】

【2】 少し下から】

草介【首筋へキスしながら】お姫さまの肌、すべすべで気持ちいい。

しかも、めっちゃいい匂いします」

ES 衣擦れ（胸元だけだけ）

【2↓1 下へ】



草介【首筋から胸元へキス移動しつつ】

……ねえ、もつと嗅いでもええですか？

着物、全部脱がせて。お姫さまの身体、早よ見たい」

【ヒロイン、うなづく】

【1 ヒロインの顔を見て】

草介「布団、もう敷いてあるんですね。

【しみじみ】そんなに俺の事、待っていてくれはったん……。

せやけど、もうちよっとだけ待っててもらえますか？

やっぱり、体も洗わへんまま、

お姫さまと初夜を迎えるのはちよっと……ね？

それに、ちよつと落ち着かせへんと、

恥ずかしいことなりそうやし……」

【ヒロイン「恥ずかしいことって？」】

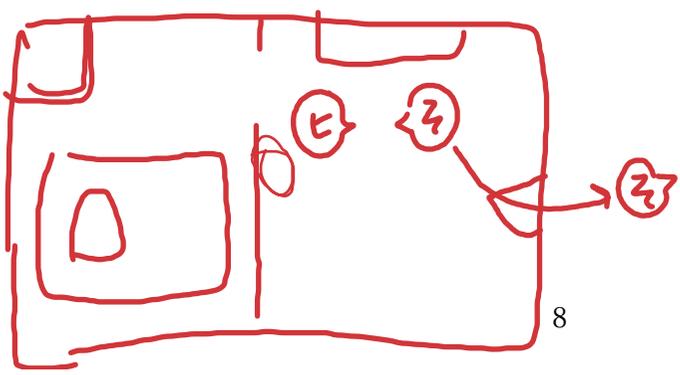
草介「そんなん、お姫さまに説明できるわけないやないですか！

あ、にやにやしてません？

もう……！！

ほんまにすぐに戻りますから、布団で待っててください！」

SE: バタバタ走り去る



●トラツク2 睦言

体を清め、ヒロインの元に戻り、初夜を迎える二人。
初々しいあまあまセックス。

SE: 蝉の泣き声

【草介、布団で待っているヒロインを抱き寄せる】

SE: 抱き寄せる衣擦れ

【7 耳元で】

草介「ほんまに、ええんですね……?」

冷静なっ、やっぱやめたいと思っはんにやったら、
ちゃんと言うてください。
今やったら、まだ……」

【ヒロインにぎゅっと抱き返され、どきっとする草介】

【7】

草介「あっ……」

【照れ笑い】あはは……すごい。

お姫さまが俺を抱きしめる力……

苦しいくらい。

どんな言葉より、めっちゃ伝わります」

【1】

草介「服……脱がせますね」

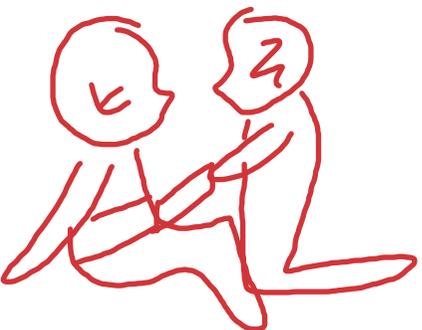
SE: 帯をほろへ

SE: 着物を脱がす衣擦れ

【1 嬌めつ眇めつして】

草介【ため息】——なんて綺麗なんやろ。

お姫さまの体……全部撫でて、触って、味わいたい……!」



【草介。ややがつつき気味にヒロインの胸愛撫する。もみながらなめたりしゃぶったり】

【1 やや下から】

草介「ん…………、はぁ…………、んむ、ちゅっ…………。」

あ…………、想像してたより、ずっと柔らかい。

ふにふにしてて、俺の身体と全然違う。

肌が餅みたいに、指に吸い付いてくる…………。

…………も…………

さっきまで淡い色してたのに、ザクロみたいに真っ赤になって。

女の人の身体って、こんななんや。

かたあなって、つんと上向いてて…………しゃぶりやすそう」

【草介、胸を舐めるリップ音のみ30秒程度】

SE:びくことなるヒロイン

草介「うわ…………！」

【おぞおぞ】い、痛かったですか？

今、ビクってなったから…………」

【ヒロイン、首を左右に振る】

草介「痛くない？　せやったら…………もしかして、

気いやった…………ってこと…………ですか？

お姫さま、なんで顔隠したはるんです？

こっち見てください。

やないと俺、不安なってます」

草介「顔、真っ赤んなってはりますね。

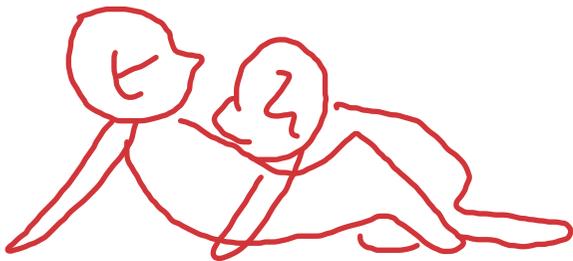
恥ずかしい？　それか、気持ちよかった？

ふふ、可愛い…………可愛い♡」

【3 耳元】

草介「ねえ、お姫さま。足、開いてもらてええですか？

お姫さまの大事なところ、はよ見たい…………」



【ヒロイン、従う】

【1】

草介「うわ……すごお……」

絵えで見たんより、ずっと綺麗や。

それに、めっちゃ濡れてる。

さわりますけど……痛かったら、言うてくださいね？」

SE: 秘所に触れる

SE: 水音ゆっくり目にねちねち

草介【感嘆】「すご……あつうて、ぬるぬるしてて……」

めっちゃやらしい。

ね、舐めてみてもええですか？

お姫さまのここ、味わってみたい……」

【ヒロイン頷く】

SE: 水音ストップ

SE: 草介が体位を変える衣擦れ

【草介、ヒロインの股間に顔を埋める】

【1 下から】

草介「ああ、足、閉じひんで。

膝立ててて、そのまま……」

【舐め音二十秒程度、合間に台詞】

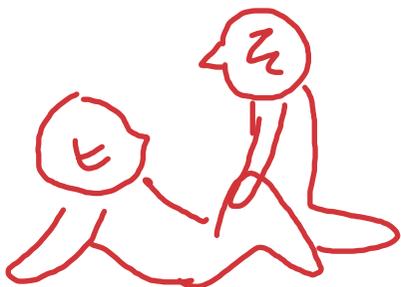
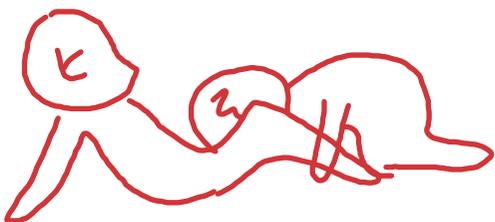
草介「ん……甘い。

この音、聞こえます？

中からようさん蜜が溢れ出してて、

舐めるんが追いつかへんくらい

指と舌で、いっぺんに触ったらどうなるんやろ」



SE:指を入れる水音

【1 下から】

草介「すごい。

俺の指、どんどん呑み込んでってる。

それに、この尖ったとこ舐めたらきゅううて締まって……

指、もう一本入れてもええですか？

ゆっくり……ゆっくり……」

SE…水音

草介「わ……二本目もすんなり呑み込んだ。

大丈夫ですか？ くるしない？

お姫さまの感じるところ、一緒に探していきましょうね。

この辺かな？ それか——こっち？

なめながら、お姫様の気持ちいいとこ見つけたげます」

【舐めるリップ音のみ30秒程度】

SE…水音ゆっくりめにねちねち

草介「はぁ……かいらしい声……

感じてくれてはるんですね、俺の指と、俺の舌で」

【草介、改めてヒロインにのしかかる草介】

SE…体位変える衣擦れ

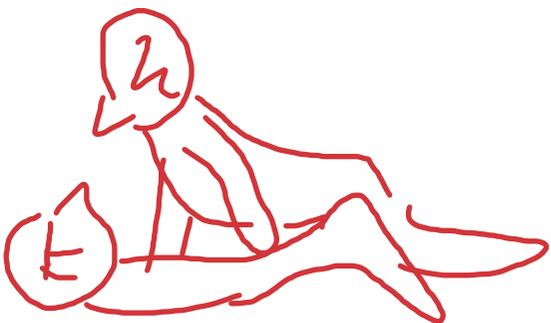
【1】

草介「お姫さま、気持ちよさそうな顔してはる。

腰、俺の手にぐいぐい押し付けて……

もっと激しいしてほしいんですか？」

【ヒロイン頷く】



【3 耳元】

草介「素直で、いやらしいて、なんてかわいいお姫さま。

お姫さまのエエとこ、何回も、何回も撫でてあげますからね」

SE…水音徐々に激しく

草介「なか、ぎゅうぎゅうしまる。

俺の指、食いちぎられそうや。

ねえ、イク時、ちゃんとイクって言うてくださいね？

イクときの顔、俺に見せてください。

ねえ、聞いてます？ もうイきそう？

ええですよ、イって。ほら、ほら……！」

【ヒロイン絶頂】

SE…激しめの衣擦れ

SE…水音ストップ

【1】

草介「ああ……はは……イっちゃいましたね。

俺の指でイッたお姫さまの顔、めっちゃ可愛い。

見て下さい。お姫さまの蜜が、布団に大きい滲み作って……」

【7 耳元で】

草介「甘えたように」ね、お姫さま。そろそろええですか？

ほら、俺のも、もうこんななって……痛いくらい。

はよお姫さまの中に入りたい。ええでしょ？

『よし』て、言うてください」

【ヒロイン「よし」】

草介「ああ……お姫さま……！」

愛してます……お姫さま、お姫さま……！」

SE…ゆっくり挿入音

【7】

草介「あ……あぁっ。あかん。

全部、奥まで……

お姫さまの中、気持ちい……ッ

あつうて、とけそ……っ」

【1】

草介「もう、動いて大丈夫ですか？

痛ない？

すいません、俺、全然余裕のうて……！！

どうしよ、腰、勝手に動いて……あ、ああ……！！」

SE…ピストンゆっくり↓速め

【吐息のみ1分程度】

草介「はぁ……あぁ、あかん、すぐ出てまいそう。

腰、止まらへん……っ！

う、あ……っ。なんなんこれ。

こんな気持ちええなんて、聞いてへん……」

草介「お、お姫さま、そんな締め付けんといて。

ふう、ふう……っ。

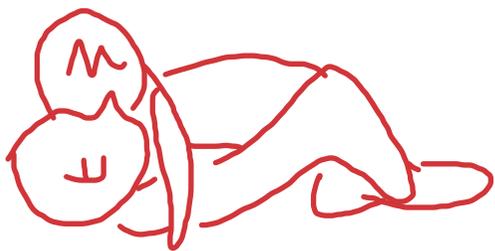
やないと俺、もう……

あつ、んあ……っ。あかん、中、きつううねって……。

あぁ、出る……っ。出……う、うあぁっ」

SE：射精音

【息を整える。十秒程度】



【1】

草介「はあ、はあ……はー……」

【はっとして】わ、す、すんません！

お姫さまかて初めてやのに、

俺ばっかり夢中になってしもて！

ど、どっか痛くしてませんか？ 血いとか、出てませんよね？」

【ヒロイン、草介の慌てぶりに気が抜けてクスクス】

草介「わ、笑わんとつてください！

こんな気持ちええて、知らんかって……

こんなん、みんなどうやって正気を保ってはるんです!？」

【ヒロイン、大笑い】

草介「そんな笑う事ないやないですか……!!

もう……最初やから、ちよつと驚いただけですし！

次はちゃんと、お姫さまを思いっきり気持ちよーくしてみせますから!」

草介【ふと笑って】ほんまに、夫婦みたいなやり取りですね。

幸せやな、俺……すごい幸せ。

ん……？ 疲れました？

嘘、くつついてまいそうですね。

このまま二人で、ぎゅーつとしたまま、寝てまいましようか。

おやすみなさい。

俺の可愛い奥さん（額にキス）」

●トブック3 夢からさめて

幼い頃、三人で遊んだ楽しい思い出を夢に見るヒロイン。

一転、夢から目覚めたヒロインは、ふたりの行方を捜し当てた一臣によって地獄にたたき落とされる。

一臣 十九歳

草介 十二歳

場所…お屋敷の一室

時刻…夕方

SE:風鈴ちりりりん

【縁側で転寝をしているヒロインに、一臣が歩み寄る】

【3】

一臣「お嬢さん——お嬢さん」

【ヒロイン、一臣に呼びかけられてはっとする】

【1】

一臣「おはよう——転寝をしていたんだね。」

いい夢は見られたかい？

今日は新しい贈り物を持ってきたんだ。

なんだと思う？」

SE:…ごそごそ

一臣「ほら、舶来品の手鞆だよ。黄金色に光っていて、とても綺麗だろう？」

君が好きだと思って、横濱から取り寄せたんだ。

きれいだろう？

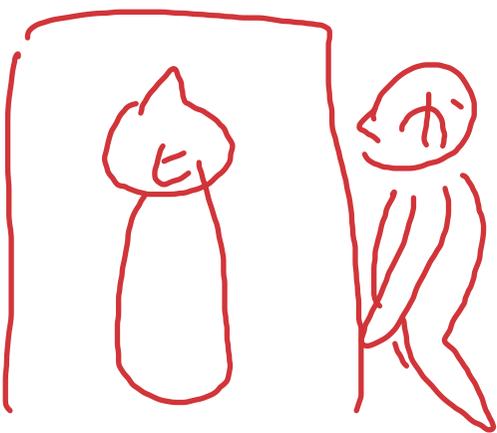
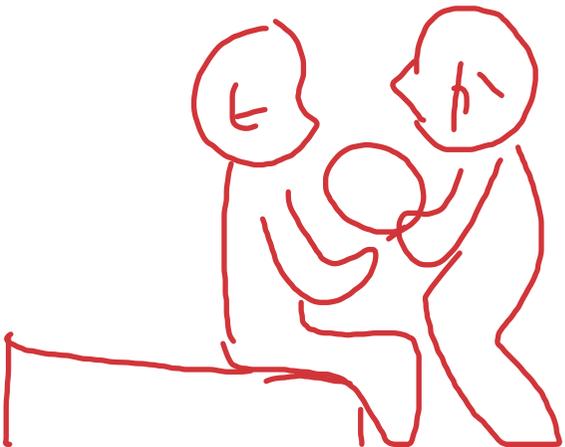
今日はこれで一緒に鞆突きをしようか。

……ん？ どうしたの？」

一臣「……ああ、草介のことが気になるのか？

そういえば、お嬢さんとは年ごろも近いからね。

じゃあ今日は、三人で一緒に遊ぼうか」



【一臣、庭に立って控えている草介に声をかける】

【1 ヒロインに背を向けて】

一臣「草介。草介！」

【9】

草介「はい、一臣さま。なんでしょう」

一臣【優しく】「お嬢さんは、君のことが、
気になって仕方がないようだ。
こっちにおいで。一緒に遊ぼう」

草介「と、とんでもございません。」

俺——私はいやしい使用人でございます。
華族の方々と一緒に遊ぶなんて……」

一臣「困ったな……立場こそ使用人という形をとっているけど、
僕は君を弟としてそばに置いているつもりなんだけどね」

草介「お、弟やなんて……私は所詮、妾の子で……」

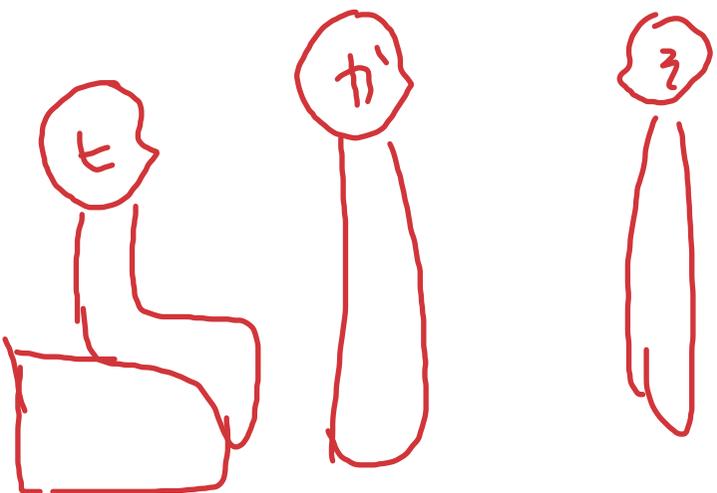
一臣「いけないよ、草介。
それ以上僕の弟を侮辱することは、
この僕が許さない」

草介「も、申し訳ありません……！」

一臣「わかったら、さあ、こちらへ。
大切なお嬢さんを待たせてはいけない。
何年かしたら、僕の奥さんになる大切な人なのだからね」

SE:意味深な風鈴ちりりりん

【場面切り替え】



草介と幸せな眠りについていたはずのヒロイン。
だが目を覚ますと、一臣によって暴行されている草介の姿が。

SE…蝉の泣き声

SE…打撃音

SE…ドンガラガッシャン

【草介、下男に殴られて吹き飛び、柵に突っ込む】

【12】

草介「ぐああ！」

【ヒロイン夢からさめる】

【一臣、柵から落ちてきたものに埋もれてうめいている草介に対し、心底失望の色をにじませて語り掛ける】

【10 12を見ながら】

一臣「はあ……」

まったく……

少し殴られたくらいで、あまりみっともない声を上げるものじゃないよ。

相応の覚悟を持って、僕を裏切ったんだろう？

まさか、情をかけた弟に裏切られるなんてなあ。

羨不足が招いた悲劇か……」

【11 真横を見ながら】

一臣「おい、お前たち。何をぼんやりしてるんだ。

そこでへばってる身の程知らずの愚弟を痛めつけろ、徹底的にな」

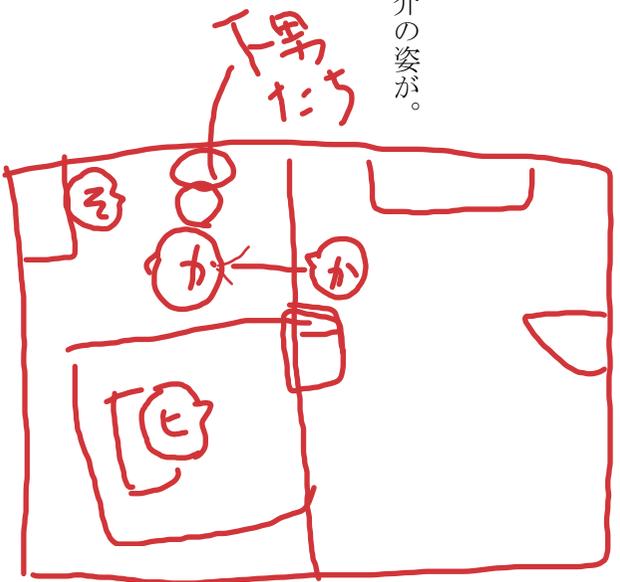
SE…殴る蹴る

草介【殴られる呼吸しばし】「

【ヒロイン「やめて！」と叫んで一臣にしがみつく】

SE…走る足音

SE…ぶつかる音



【1】

一臣「ぶつかられて驚き」おっと……！

ああ、おはようお嬢さん。

ぐっすり眠っていたのに、すまないね。

少しうるさくしてしまったかな？

けど……そんなはしたない格好で飛び出してくるなんて、

感心できないな。寝ている間に着崩れてしまったのかい？」

【ヒロイン「どうしてこんなことを？」】

一臣「ふふ……大丈夫。怖がらなくていい。

殺しはしない。よくある躰だよ。

草介はね、僕を裏切って、僕の大切なものを盗んだんだ。

だから罰を受けなくちゃいけない。

わかるだろう？」

【ヒロイン「大切な物って……？」】

一臣「ん……？ わからない？」

僕の大切なものが何か。

それとも——」

【3 耳元で】

一臣「わからないふりをしているだけかな？」

【ヒロイン「草介を殴るのをやめさせて」】

【1】

一臣「そんなに草介を許してほしい？」

ほかならぬ君の頼みだ、かなえてあげてもいいけれど……

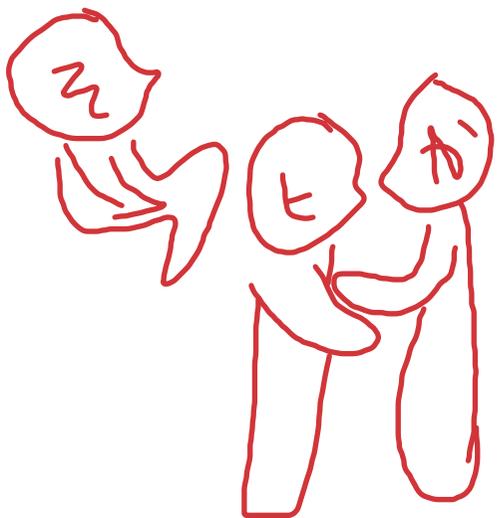
代わりに、君ば僕に何をしてくれる？」

【12】

草介「や、やめてください！

俺はどうなっても構いませんから、

お姫さまにだけは手えを出ささんといってください……【殴られる】あぐー！」



【1】

一臣「うんざりしたように」まったく……うるさくて話もできないな。

【12を見て】おい、少し休ませてやれ。

気絶でもされたら興ざめだ」

【1 ヒロインに向き直る】

一臣「ああ、そんな顔しないで。お嬢さんは相変わらず優しいな。

大丈夫、加減を間違えて殴り殺すような間抜けじゃないよ、私の護衛は。

【室内見回しながら】それにしても……」

一臣「なんてみすぼらしい小屋なんだ。

僕の大切な婚約者がこんな場所で一ヶ月も暮らしていたなんて、考えるだけでぞっとする」

一臣「一時の感情に流されて、甲斐性なしの間男と逃げたせいで

要らぬ苦勞を味わったね。

でも、もう大丈夫。家に帰ろう。

祝言の方は、君が病気で臥せっているって理由で、どうにか延期できたよ。帰ったらすぐに準備に取り掛かろう」

【ヒロイン、拒否する】

一臣「嫌……？」

まさか君は、こんな粗末な家で、

ボロ布みたいな着物をまとった生活のほうが良いつて言うの？

そうか、それは困ったな。うーん」

一臣「いいかい？ 君と僕の結婚は、幼いころから決められてることなんだ。

だからこそ、君の生家は今まで貴船の支援を受けてこられた。

それなのに、大人になった君が約束を果たさないのは……

とても、とても悪いことだと、わかるよね？」

【ヒロイン、うつむく】

【1】

一臣「僕は努力してきたつもりだよ？」

売られるような形で内に来た君が、

少しでも辛くないように、君に愛される努力をした。

小さい頃は君だって、僕のお嫁さんになると言ってたじゃないか。

目をキラキラさせてさ。

なのに、どうして急に草介なの？

僕が優しすぎたから、少し退屈してしまったのかな？」

一臣「だとしたら、僕の努力不足だったね。

君がそう望むなら、僕は夫として、

厳しく君を躾けることにするよ」

【12】

草介「やめて下さい！ お姫さまに何をするつもりですか！？」

【1 12に向かつて】

一臣「何って……お嬢さんが望んでいる通りの刺激を与えてやるだけさ。

夫が相手でも火遊びはできるって、

じっくりと体に教え込んであげよう。

お前もそこで見ているんだよ。

お嬢さんは僕のものだって、

きちんと理解してもらわないといけないからね」

一臣「下男に向かつて」お前たち、そいつを柱に縛り付けておけ」

草介「やめえ！ 離せ、俺に触んな！」

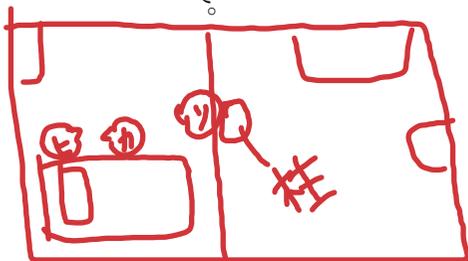
お姫さま、逃げてください！ お姫さま！」

SE：柱に縄で縛り付ける

【1】

一臣「ねっとり愉悦」ふふ、お嬢さん。そんなに不安そうな顔をしないで。

大丈夫、たくさん可愛がって、気持ちよくしてあげるからね」



草介「やめろ！ やめろ！ やめて……！」

【弱々しく】やめて、ください……！」

お姫さまは悪ないんです……！」

お願いです、兄さん。後生ですさかい……！」

一臣【意外そうに】——兄さん？ へえ、そうか。

まだ、僕をそう呼んでくれるんだね。

婚約者を奪って逃げだすくらいだから、

よほど憎まれていたのだと思っていたけれど……

【機嫌よく】そうか、そうか。

なら、これは兄弟げんかだ。

何も持っていないお前が、

何もかもを持つている僕をうらやむ気持ちを、理解しない僕じゃない」

草介「せやったら……！」

一臣「ならば相応の恭順を示せ、草介。

兄から奪ったものを返し、

申し訳ありませんでした、もう致しませんが誓うんだ」

草介「そ、それは……」

一臣「どうした……？ 言えないか？」

SE:ヒロインから離れ、草介による足音

【一臣、縛り上げられている草介に歩み寄る】

SE:草介の髪をつかむ

【10】

一臣「言えよ草介。言え、言え！」

“お姫さまは一臣様のものです、二度と手出しは致しません。

それがお姫さまの幸せです”と言うんだ！”



【10】

草介「言えません……！ 言えへん！」

お姫さまは自由になりたがってはった！
兄さんもお姫さまを愛してんねやったら、
どうか俺たちを見逃してください！」

【10】

一臣「【いらだって草介を殴る】黙れ！」

SE：顔を殴る音

草介「あぐっ……！！」

一臣「困った弟だな、お前というやつは。

そもそも、弟とはそういうものか……

お前は信じてるのだね、真実の愛というものを。

ならばお前にも見せてやろう。

お前の信じるものが、いかに安っぽいハリボテかをな。

【手下へ】お前たち、こいつの口をふさいでおけ」

草介「あかん、やめえ！ 【口に布を押し込まれる】むぐう……！！」

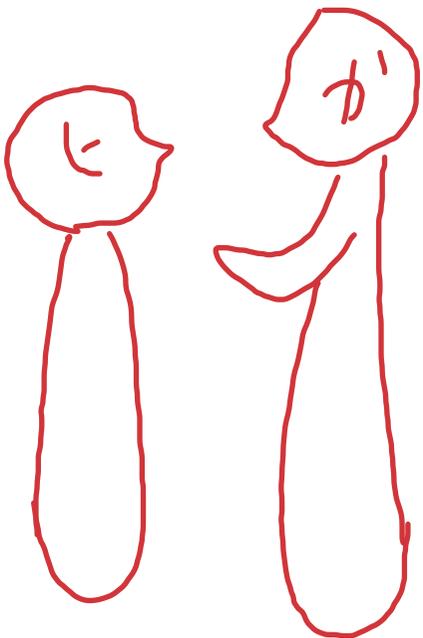
SE：ゆっくり歩き寄る足音

【1】

一臣「優しく】お待たせ、お嬢さん。

草介とは、もう十分遊んだらろう？

おいで——次は僕と遊ぼうか」



●トラック4 悪夢に囚われる

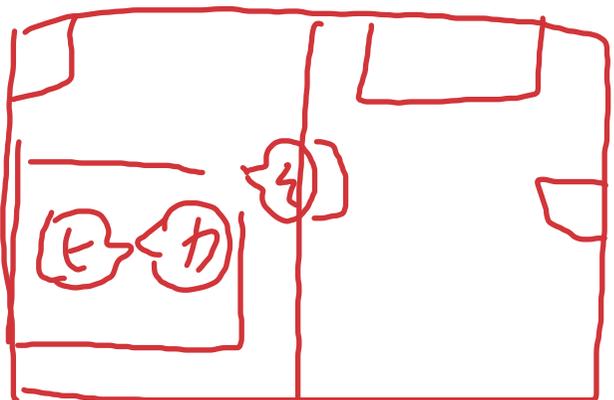
草介の目の前で一臣に犯されるヒロイン。
凌辱してるだけのトラックです。

【一臣、寝床にヒロインを組み伏せている】

【右耳 耳舐め30秒程度】

【3】

一臣「ふふ、かわいい。耳を舐めているだけなのに、
こんなに身体をビクビクさせて。
もしかして、草介に見られて興奮してるのかな」



【なんとか縄から抜け出そうと暴れる草介】

草介「んんっ、ぐううっ」

【1】

一臣「あーあ……お嬢さんのきれいな肌に、
下品な赤い痣がびっしりだ……
全部、僕で上書きしてあげないとね」

【一臣、胸全体にキスマークを落とす 秒数お任せします】

一臣「はあ……ああ、これでいい。」

全身が赤くほてって、しっとり汗ばんで……
素直な体だね。

いい子だ、いい子。

さあ、足を開いて。君の大事なところ、僕によく見せて」

【ヒロイン、従わない】

一臣「どうしたの？ 僕に見せるのは嫌？
草介には見せたのに？
嫉妬してしまうなあ」



【7 耳元で】

一臣「嫉妬に狂った僕が、草介を殴るところが見たいのかい？」

【ヒロイン、慌てて従う】

【1】

一臣「そう、いい子いい子。」

君は本当に、賢くていい子だ」

【草介、ヒロインが犯されるのを阻止したくて、声を上げるが、成すすべもない】

【10】

草介「んん——ッ」

【1】

一臣「ほら……草介がわめいてる。」

君を奪われる苦しみがどれほどのものか、

身をもって味わってるんだ。

僕が味わったのと同じ苦しみをね。

もっと苦しめてやろう。

僕と、君で」

【一臣、ヒロインの秘部に触れる】

SE：触れる水音

SE：ゆっくり目にねちねち

一臣【吐き捨てるように】思った通りだ。

君の奥から、あいつの蒔いた種が溢れてくるね。

君にという花にふさわしくない、汚らわしい卑賤の種だ。

これから僕の魔羅を君の奥まで押し込んで、

奴の汚い子種を全部全部かき出してあげる」

【ヒロイン、泣き出す】



一臣「ああ、泣かないで。

ほら、涙を舐めてあげる。ちゅっ……ちゅっ……。

可愛い……とっても可愛いよ……」

【1↓3】

一臣「さあ、僕の首に手をまわしてごらん。

ぎゅって。怖かったら爪を立ててもいいし、

歯を立ててもいい。

入れるよ。一番奥まで。そうら……!」

SE…挿入音(速め)

一臣「嬉しそう」あっ……は。簡単に入った。ちゅった。

ほら、見てごらん。草介のと混じって、

お嬢さんのいやらしい蜜がたくさん溢れ出してきたる」

【草介、口をふさがれたまま泣きむせぶ】

【10】

草介「んう……んうう……うう……!」

【一臣、草介の泣き声に気づいて、草介に見せつけるように体位を変える】

一臣「なんだ？ 草介、おまえ……泣いてるのか？

はは……あっはははは！

大の男が、そう簡単に泣くものじゃない。

ほら、泣いてないでよく見てごらん。

お嬢さんが食欲に僕を啜え込んでるところを」

SE…体位を変える衣擦れ

【一臣、組み伏せていたヒロインを背面座位で抱きかかえる】

【6】

一臣「ほら、お嬢さん。僕の胸に背中を預けて。

こうすると、より深く入るだろう？

草介に見せてやるといい。大きく足を広げて、腰を揺らして。

君の体は、僕を受け入れるようにできてるんだって」

SE：「J」ストーンゆくりめ

一臣「はあ、はあ……ああ、いい具合だ。

奥をゆつくりえぐりながら、かわいい乳首もいじめてあげようね。

こうやってつまんで、転がすと、たまらなくイイだろう？」

【ヒロインいやいや】

一臣「嫌？ 何が？」

もっと強くしてほしい？ こうやって、ぎゅって……」

【ヒロイン、軽くイク】

一臣「ああ、軽くイクってしまったね。でも、まだまだだよ。

僕が満足するまで、何度も、何度もイキ続けるんだ。

なあ、草介。

耐えきれない快樂にもがくお嬢さんは、とても綺麗だろう？

夫婦の営みって尊いものだね」

SE：出し入れする水音（だんだん早く）

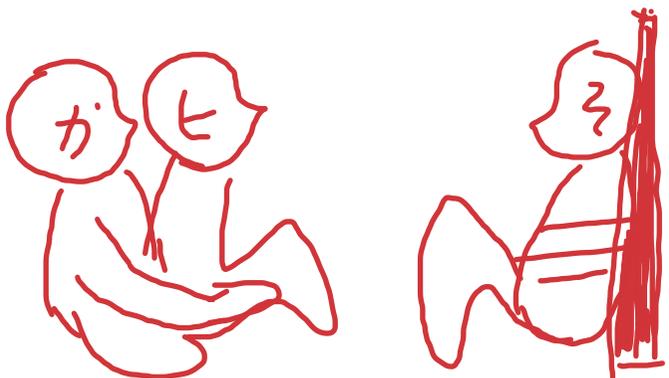
【一臣、30秒程度吐息のみ。泣いてもがくヒロインを責め立てる感じで】

一臣「っはは……怖い？ そう……イキっぱなしだものねえ。

草介とは比べ物にならないだろう？

当然さ。君のいいところは全部知ってる。

何度も、何度も……僕はこうして、君にまぐわいの喜びを伝えてきたんだ」



【6】

一臣「草介との初夜、痛くなかっただろう？」

屋敷を出る前、僕に抱かれる夢を何度も見ただろう？
夢じゃないんだよ、全部夢じゃなかったんだ……！」

一臣「つくづく哀れな男だなあ、草介は……！」

自分が初めての男と思って、

天にも昇る心地だったろうにね。

ふふ、あははははははははははっ」

SE：ピストン激しく

一臣「はあ、はあ……ああ、いい子だ……いい子。

ご褒美を上げようね。君は貫かれながらの口づけが、好きだろう？
舌を出して。ほら、思い切り……」

【キスハメ、30秒程度吐息のみ】

【1】

一臣「ん、ん、ちゅ……っ。

中、キュウキュウって締まって、

しゃぶるように絡みついてくる……。

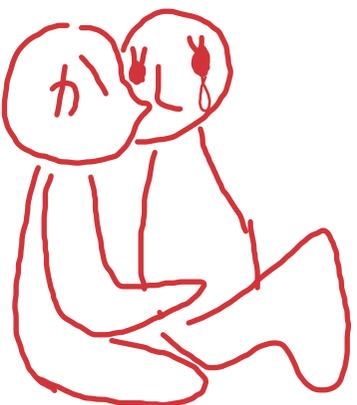
また達しそうなのかな？

いいよ、一緒にイこう。一番奥に出してあげる」

【フィニッシュまで吐息のみ。秒数お任せします】

SE：射精音

【一臣しばし息整える。十秒程度】



【6】

一臣「長々ため息」。

すごいな。君のここ、漏らしたみたいになびちやびちやだ。

まだ、イクの止まらない？

体ビクビクさせて、かわいいね。

かわいい、かわいい。

離れていた分、まだまだいっぱいしようね」

【ヒロイン「草介を許してあげて」】

一臣「少し驚いて」……へえ？ この状況でも、

まだ草介の心配をしてるんだね。

お嬢さんは、そんなに草介のことが好き？」

【ヒロイン、うなづく】

一臣「しょうがないな……」

いいよ。許す。僕だって、実の弟が憎いわけじゃない。

僕一人だけ捨てられたみたいで、少し傷ついたただけだ。

【1に向かって】お前たち、草介をほどいてやれ」

SE:縄なまこほなへへ

SE:床とこに倒れる

【10】

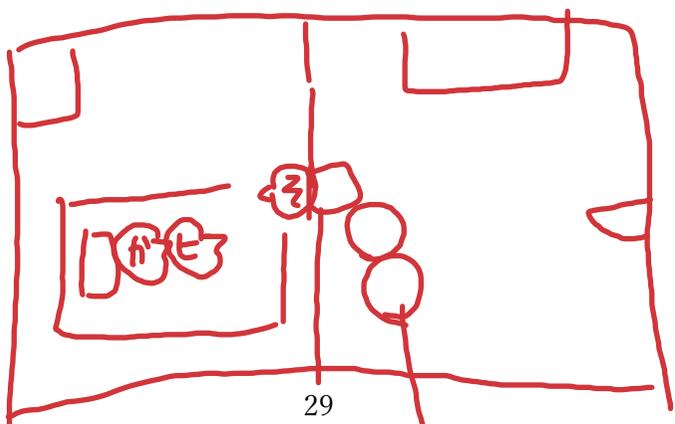
草介「泣きながら」お姫さま……すいません……

俺、守れへんくて……すいません、すいません……!!」

一臣「泣いてないで、こっちへおいで。」

三人で一緒に遊ぼう」

草介「……え?」



下男たち

●トラック5 三人一緒に

一臣の支配から抜け出せない草介とヒロインの悲壮な3車トラック。

【10】

草介「あ、遊ぶって……どういう意味ですか……？」

【6 10を見ながら】

一臣「説明しないとわからないかな？」

君と僕で、お嬢さんを一緒に

気持ちよくさせてあげようって言ってるんだ」

草介「そんな無理です！ ありえへん……！」

お姫さまを苦しめるだけです！」

一臣「苦しむ？ どうして？」

これはほかならぬお嬢さんの望みなんだ。

草介を仲間外れにしないで、

また三人で仲良くしてほしいっていうね。

まさかお前は、それを断ったりはしないだろうね？」

【6 ヒロインに耳打ち】

一臣「ほら、お嬢さんも草介を呼んでおやり。

一緒に遊ぼうって、声をかけてやるんだ。

それとも、草介を許してやってほしいというのは、嘘？

もう草介なんていらんかい？」

【ヒロイン、草介を呼ぶ】

一臣「ふ……ふふふ……あははははは！

聞こえただろう草介。

お嬢さんが呼んでいる。

大切なお嬢さんを待たせては申し訳ない。

はやくこっちにくるんだ」

一臣「それとも、今度は一人で逃げ出すかい？

お嬢さんをここに置き去りにして」

【草介、すべてを諦めて一臣に従い、二人に歩み寄る】

SE:ゆくりと近づいてくる足音

【6】

一臣「ああ、よかったねえお嬢さん。」

草介も一緒に遊んでくれるって。

でも、こちらの花で遊べるのは夫である僕だけなんだ。

だから、ね？ 草介にはもう一つの花をあげるといい。

僕も触れたことがない、特別な花だ。

きつと草介も喜んでくれる」

【ヒロイン、何のことかわからない】

【6→1】

一臣「わからない？ そうだよね。」

いいよ、全部僕が教えてあげるから。

ほら、こっちを向いて、僕にまたがって。

尻を草介に向かって突き出すんだ」

SE:騎乗位に体位を変える

一臣「草介、君に説明する必要はないね？

どうせ、厨にでも隠してあるんだろう？

調べてあるよ。君がお嬢さんを食わせるために、

何を使って稼いでいたかくらい。

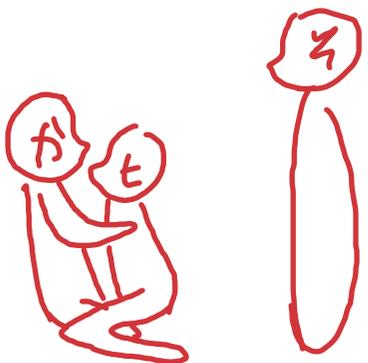
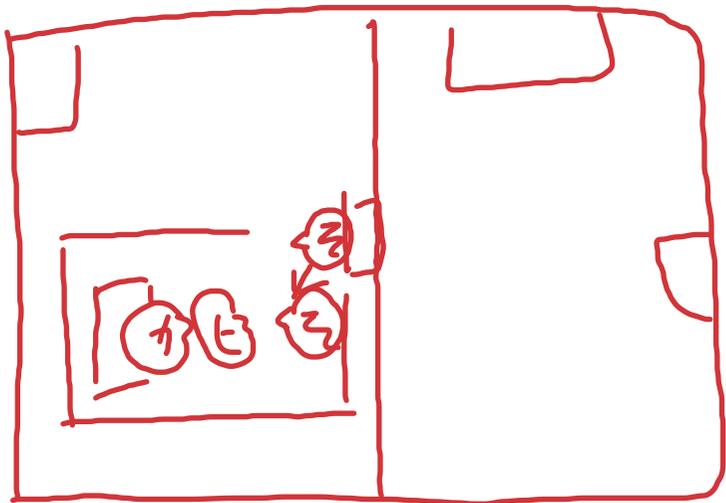
自分が使っていたものだ。お嬢さんにも安心して使えるだろう」

草介「……はい、一臣様」

SE:歩き去る足音

SE:布に油をしみこませる

【わけがわからず、不安がるヒロインの腰を撫でながら】



【1】

一臣「大丈夫、怖がらなくていい。

君は僕に全て任せて、身体を委ねるだけでいいからね……
わかるかい？ さつき君の中に入って、これ。

もう一度君の中に入れてくれる？

ゆっくりと腰を落として……ああ、そう……上手だ」

【騎乗位で挿入】

一臣「ん……っ、は。ははっ。

よくほぐれてる。

さつきより居心地がいいよ。

この感じだったら、

草介を仲間外れにせずにすみそうだ」

SE:戻ってくる足音（ヒロインの背後でストップ）

【草介、和紙に含ませた潤滑剤を、唾液でふやかしてヒロインの尻に塗る】

【5】

草介「お姫さま、お尻、ちよつとぬるぬるしますけど、がまんしてください。

俺がつくったやつなんで、悪いもんは何（なん）も入ってませんし」

【草介に向かって】

一臣「ああ、たっぷりと塗りこんでやれ。

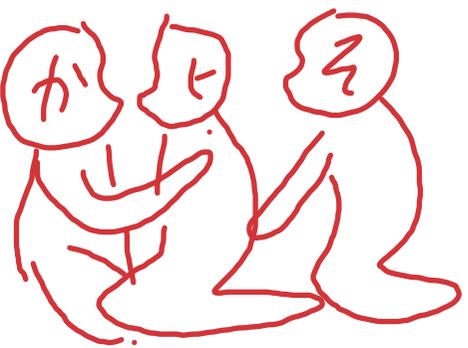
ケガをさせないようにな」

SE:ローション系ぬるぬる音

【ヒロイン、予想外のところに触れられ、驚いて暴れる】

SE:ジタバタ

【1】



一臣「おっと……！」

しい、しい……暴れないで。大丈夫、大丈夫だから。
何も怖いことはないよ。草介を信じてやっつて。
さあ、草介。やるんだ」

【5】

草介「一臣様……やっぱり、こんなこと——」

【1】

一臣「草介のセリフを遮る」やれ」

草介「覚悟を決めて」お姫さま……

堪忍してください……！」

SE: 挿入音ゆーっくり、きつめ (次の草介の台詞に被せて)

草介「あ、ああ……！」

赦して……赦してください……っ。

ん、あ……きつつ……」

【1】

一臣「庄迫感を感じながら」ああ……つく……

っはは、これは……僕もキツいな。

けど、ほら……奥まで入った。

どうだい草介、お嬢さんの初めてを奪った感想は。

ほら、こうして僕が動く……

お嬢さんの柔らかな肉の壁を通して、

君の物も搾り上げられるだろう」

SE: ♪ストーンゆっくりめ

草介「色っぽく」ああ……う、動かんで……！」

はあ……はあ……。ん、あ……っ

お姫さま、ごめんなさ……

あかんどないしよ……気持ちい……ッ」



【5】

草介「んっ、うっ……」

気持ちよくて、腰、止まらへん……。

ごめんなさい、ごめんなさいいいい」

【次の草介の台詞まで、草介の喘ぎ声ループさせてください】

【1】

一臣「男のくせに、なんて声で鳴くんだろうね。

これじゃあどちらが女かわからない。

ほら、お嬢さんも負けずに鳴くとい。

気持ちいい、気持ちいいって……ほら、ほら！」

【一臣、吐息のみ1分程度】

【ヒロイン前後を犯されて「壊れる」と泣く】

一臣「壊れる？ そう。それはいい。

壊れて、わけがわからなくなつて、

僕の従順なお人形に戻ろうねえ。

ほら、もっと気持ちよくなれるように、

この可愛いお乳を吸ってあげる。ん、ちゅ……じゅる……」

【舐め音二十秒程度】

草介【切羽詰まって】 ああ、お姫さま……お姫さま……。

俺、もう……」

一臣「ああ、いいよ。僕もいい頃合いだ。

ほら、お嬢さん。草介に許しを与えてあげないと。

一緒にイこうって、言っておやり」

【ヒロインわけもわからず叫ぶ】

【5】

草介「ああ、お姫さま……お姫さま、お姫さま。

ありがとうございます、ごさいます、ごめんなさい、いやや、気持ちいい、気持ちいい、あつ、ああ……っ【フィニッシュ】」

【一臣、草介より余裕ある感じで、控え目に終わってください】

【1】

一臣「ふ……う、ああ……ッ！【フィニッシュ】」

SE：射精音二人分

【草介、一臣、十秒程度呼吸整える】

一臣「はあ……ああ……はは。

三人一緒にイけたね。これで仲直りだ」

【ヒロイン抱きしめ優しく】

一臣「さあ、帰ろう。二人とも。

僕たちの家へ……」

●トラック6 狂執の箱庭で

トラック3から一週間後。

貴船家に連れ戻されたヒロインは、座敷牢に閉じ込められている。

光の差さない牢獄の中、何不自由ない暮らしをさせてもらえるヒロイン。

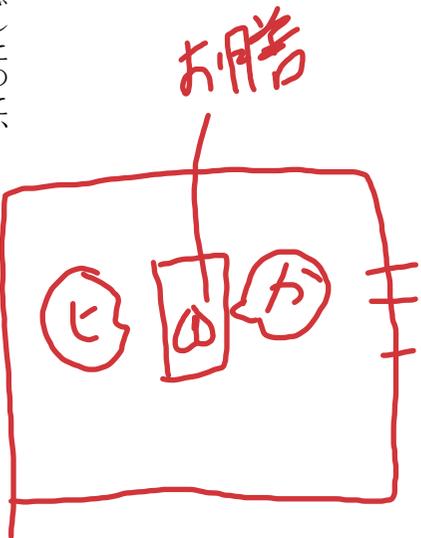
そこに一臣がやってきて、ヒロインさえこのまま良い子にしているなら、草介の身の安全を保証すると脅す。

食餌プレイ。

場所…お屋敷の地下牢

時刻…夕方

SE…食器をひっくり返す音



【ため息付きながら】

一臣「やれやれ。せっかく君の好物を用意したのに、

またそんな風に癩癩を起して……

美味しいものが可哀そうだろう？」

【ヒロイン「外に出たい」】

一臣「外？ ああ、いいよ。

明日にでも、二人で芝居でも見に行こうか。

【ほっとして】「なんだ、それでイライラしていたのか。

確かに、君が屋敷に戻ってきて一週間……

一歩もこの座敷牢から出ていないものねえ。

祝言の用意でバタバタしていて、かまっで上げられなくてごめんね」

【ヒロイン「草介は？」】

一臣「草介なら、心配しなくても元気に過ごしてるよ。

明日の芝居にも連れて行ってやろう。きつと喜ぶ。

さあ、つまらない話はこのくらいにして、一緒に水菓子を食べよう。

世話役の女中から、君の食欲がないと聞いてね。

特別甘いものを市場から取り寄せて、よく冷やしておいたんだ。

……嫌？ それなら仕方ないな。僕が食べさせてあげる」

【一臣、果物一口かじり、そのままヒロインに口移しで食べさせる】

【1】

一臣「ああ……美味しく食べられたね。

それじゃ、もうひとくち……」

【一臣、果物一口かじり、そのままヒロインに口移しで食べさせる】

一臣「おっと……着物が汚れてしまったね」

胸元も、おへそまでびしゃびしゃだ。

僕が舐めてあげる」

SE：着物はだける

【夢中でヒロインの胸を舐めしゃぶりながら】

一臣「ん……美味しい。

水菓子よりずっと柔らかくて、甘くて、良い匂いがする……。

思わず食い破りたくなる」

【一臣、むさぼるようにヒロインの胸に口づける。秒数お任せします】

一臣「こわがらなくていい。大丈夫。

痛いことはしないから。

ねえ。僕がどれだけ君を大切に思っているか、

君は少しも知らないのだろうね。

子供のころ、お人形さんみたいな君を見染めた僕が、

どれだけ無理をして君を手に入れたのか……」

一臣「僕はね、君を手元に置いておくためならなんだってするよ。

だからどうか、僕を不安にさせないで。

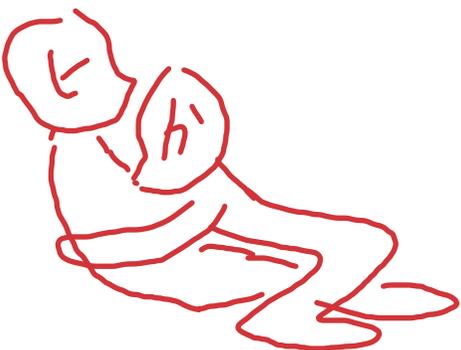
また君に逃げられるかもしれないと思うと、

どうにか頑張ってしまおうだ。

僕に見せて。君が僕をどれだけ好きか。

足を目一杯開いて、僕にいやらしいところ、見せてごらん」

【ヒロイン、そろそろと足開く】



【1】

一臣「そう、いい子だ。ご褒美をあげようね」

SE: 一臣、着物の前をはだける。

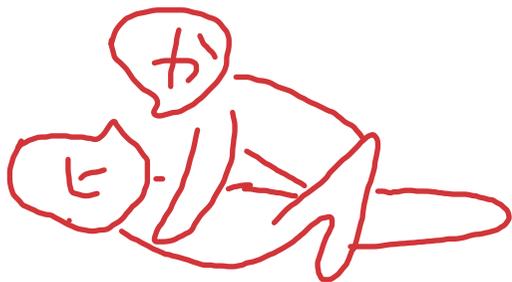
SE: 触れる水音

SE: 挿入音

SE: 2人ストンゆっくり

一臣「ああ……一週間ぶりだから、少し狭いね。

君の中、寂しかったって言うみたい、僕にすいついてくる。
肉ひだの一枚一枚が、おねだりするようにうごめいてるよ」



一臣「っ、すごい。僕のためにあつらえた名器みたいだ。

奥のくぼみにはまって、抜けなくなりそう。

はあ、はあ……好き、好きだよ……

かわいい、かわいいね……かわいい、かわいい……」

SE: 2人ストン速め

【激しめの吐息1分程度】

一臣「ああ、だめだ、君があんまり可愛いから、
今日は自分を抑えられそうにない……っ。

はあ、はあ、あ、すごい。

もう、イキそ……!!

顔隠さないで。君が可愛くイクところ、
見ながら出したいんだ」

一臣「ああ……とろけた顔、可愛い。

一緒に、気持ちよくなるうね。ふ、ふうっ……

あ、ああ……!! く……!!」

【前トラックとはうってかわって、余裕のない感じで終わってください】

SE: 射精音

【一臣しばし息整える】

【7】

一臣「はあ……ああ、僕も一週間我慢してたから、

一番濃いのが、たっぷり出たね。

これから毎日、毎日、君のお腹の中を僕の子種でいっぱいにしてあげる。

子供ができたら、草介も入れて、四人で楽しく遊ぼうね。

楽しみだなあ、幸せな家族」

【一臣、身支度を整えて立ち上がる】

SE…着物を着る

SE…立ち上がる

【1】

一臣「そのためにも、祝言の準備を急がなくちゃ。

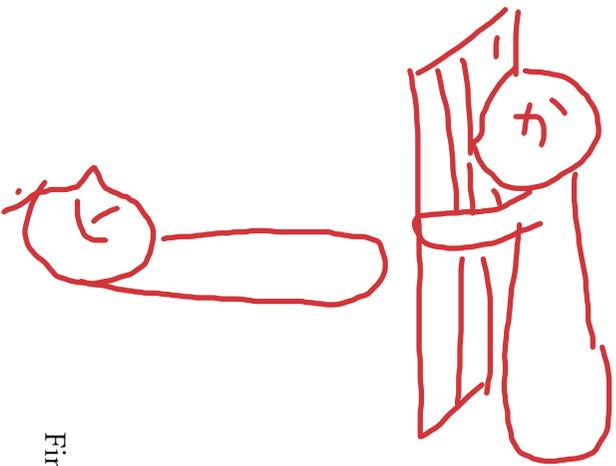
あんまり長くいられなくてごめんね。

またすぐに会いに来るから。

待っててね。僕の大事なお嫁さん」

SE…南京錠がちやり

SE…座敷牢のドアしまる



Fin